

1 初めに

私は今回人生で初めて離島に行った。船で硫黄島に着いた時、私の目に映りこんできたのは大きな崖と大きな山、そして赤褐色の海だった。それらは鹿児島市内に住んでいては感じることでできない光景で私は離島に来たのだと実感した。大きな崖は噴火した時にカルデラとして残ったものらしい。いかに大きな噴火だったかが分かる。集落は一つしかなく店も一つしかない。その一つの店も決して商品が多いわけではない。私はこんなにもものが少ない小さな島で人々は暮らしていけるのかと疑問に思った。

2 島がかかえるごみ問題と島が取り組んでいるごみ対策

島で私は大量に捨てられたごみを見た。それらのごみの元はほとんどが市内からもちこまれた商品で行き場をなくしてこの場所に捨てられたのだという。決していい光景ではない。私はその光景を見て切ない気持ちになった。しかしこの現状を打破しようと島では様々な対策が行われている。その一つがごみの分別だ。ごみを分別して分別したものを市内に持っていきそこでリサイクルしてごみを減らしている。また生ごみはそのまま捨てるのではなく五右衛門風呂の燃料にしている。私は島に一つしかない店を通った時に大量の空の空き缶とペットボトルをみた。それらはすべてリサイクルのために水で洗われていた。島のひとりひとりがこういった努力をしているのだと感じた。

3 島に住んでいる人の話を聞いて

今回私は硫黄島に住んでいる四人の方々からそれぞれ話を聞くことが出来た。一人目は小・中学校の校長先生だった。硫黄島は住人が 120 人しかいないため子供の数も少ない。そのため小学校と中学校が一緒になっている。小学生は 18 人、中学生は 4 人で先生は 10 人だそうだ。生徒の人数が少ないため、先生がひとりひとりの生徒にかける時間が多くなり生徒が理解するまで教えることが出来たり、小・中学校が合同のため先生は生徒の成長を長く見届けることが出来たりすることがこの島の学校のメリットだという。しかし 1 学年に生徒が一人しかいないために同じ年の意見を聞く場が少ないというデメリットもある。その問題の対策として最近では鹿児島市内にある附属小学校と映像をつなげて一緒に授業をしているという。私はこういった近代の技術が島の学校に役立てることが出来ることを知り、技術開発による島への貢献の可能性を感じた。二人目に話を聞いたのは看護師さんだった。この島には医者は在住しておらず看護師が在住しているのみだという。医者は月に 2 回、作業療法士は月に 1 回、歯医者はなんと年に 2 回しかこの島に訪れない。医者が在住しないため患者さんの処置は看護師さんが行う。この際看護師さんは医者から配信されるモニターを見ながら処置を行う。このように島の医療の場でも近代の技術は必要不可欠となっている。また患者さんの命にかかわる場合はヘリを鹿児島市内から呼ぶという。しかしそうなる前に危ないと判断できる場合は早めに鹿児島市の方へあがるように看護師さんが患者さんに促している。私は島の医療では医者、看護師、患者との間で相互の情報

交換が大切になってくるのだと感じた。三人目に話を聞けたのは発電所の方だった。硫黄島の発電所は規模が小さく 174 世帯を賄っている。従業員はわずか 3 人しかいない。シフト制で 3 日に一回休みがあるという。しかし旅行などの用事で島にいないときはシフトを変わってもらったことも多いそうだ。その場合一人の勤務時間が一日 15 時間を超える場合もあるがシフトを変わってもらったのはお互いさまだからと笑顔で話していた。私は島の発電所では勤務する人数が少ないからこそ、こういった助け合いが大切なのだと思う。四人目に話を聞けたのは婦人会の会長さんだった。島では 18 歳～60 歳までの婦人はほとんどが婦人会に入る。婦人会の人数は 15 名ほどでイベントでのご飯づくりが主な仕事だそうだ。月に 2 回高齢者にお弁当もつくっている。地域内での活動はほとんどがボランティアで給料は出ないという。それでも婦人会は小さな島においてコミュニケーションの場となりここでは島の情報交換もされる。婦人会の会長さんは、大変だけど楽しいよと笑顔で話していた。私は娯楽施設のない島ではこういった婦人会などの場が地域のコミュニケーションにおいて重要な役割を果たすのだと感じた。

4 まとめ

今回硫黄島に行って私は最初、こんなにもものがない島で人々は暮らしていけるのかと疑問に思った。またごみ捨て場をみて悲しい気持ちにもなった。しかし島の人々の話を聞くなかで、島の人々はみんな大変と言いつつも笑顔で話していることに気が付いた。それは島ではものが少ないからこそお互いに協力せざるを得ないからだと分かった。島が小さいからこそ島みんなが顔見知りで、ごみを捨てる際もごみ収集の方の顔を知っているから、あの人が苦勞しないようにしっかりと分別しようと思える、そう言った思いやりや協力がこの島の人々の笑顔につながっているのだと感じた。現在私の周りにはスマホやパソコンなどの電子機器があふれている。しかしそれは人との交流の場を狭めるものであるといえる。今回私は硫黄島にあってそれらを少しでも使わないようにして暮らしてみるのもいいなと感じることが出来た。